

86m長×幅14.8m×深さ7.3m、吃水5.5m、総トン数3,200トン、乗組定数87(研究員32を含む)。主機電気推進式1100HP×4基、二軸推進。マリナ型舵2基、最大速力15ノット。航海速力12ノット、航続距離2万8000Km。9研究室(気象、採水测温、海洋動植物、化学一般、生産力測定、海洋微生物、塩分調査及化学研究室、標本調査総合研究室、定温水槽、ホルマリン室、電子計算機室、重力等計測室)。

ウインチ10台(1万5,000m最深海用、6000m中深海用、2000m、1000m、小深海用観測)。観測用15トンクレーン、長さ18m、強化プラスチック製観測艇、船首より10mのアルミ製ビームで気温、風速、温度等気象観測、船底に設けた穴にとりつけ海底をボーリングする機械、極深海用音響測深機、アンチローリングタンク、サイドスラスター、振動騒音防止装置等。新船名は公募中。昭38年建造現在活動中の淡青丸(257トン)に加え、世界的の大観測活動計画が期待されている。

10 新水産海洋調査船M/S "La Salle"

この船は1965年11月ノルエー国ベルゲンAukraで建造せられ、ヴェネズエラ国(船主)に引渡しせられ、カリブ海方面で活動、海洋研究、トロール、旋網延縄など試験漁業と漁撈長訓練に当たっている。船長129'7"、幅31'2"、深13'6"、吃水11'、ロイド級+100A1"トローラー"型。432トン(重量250トン)、24人室(エアコンデション)、図書室、研究室(気象学、化学、生物学、物理学、騒音防止、各室ガス、圧さく空気設備)、冷蔵、冷凍室、主機800HP、Caterpillar D398、Liaaen 可変ピッチプロペラ及びリダクション・ギアと連動、船橋リモートコントロール。常船速11.5ノット、燃油100トン(1ヶ月海上)、2補機Caterpillar 110HP×2、85KVA発電機、淡水発電機に直結、機器と排気管は弾性吊下(騒音と振動防止)、冷蔵魚槽5500立方フィート、旋網水力ウインチA B A S、水カトロールウインチ12トン、2水力観測ウインチ、水力でトロールガントリ操作、水力操舵、自動ラインホーラー、活魚海水槽、2音響測深機ソーナー、ラジオテレフォン100W、無線方向探知機、レーダー、オートパイロット風速計、自記水温計、自記気圧計、自記気温計、等が研究設備、装置の主なるものである。

11 東京水産大学青鷹丸の水中観測筒

昭和41年1月29日進水(三保造船所)した本船は低船首楼甲板をもつ船尾トロール型で、ひき網、はえなわ、棒受網、一本釣など漁業実習とフィールド実験船として活動をはじめた。全長33.8m、幅7m、深さ3.5m、喫水2.8m、総トン数216.78、航海速力10.5ノット、航続6300マイル、乗組47名(学生26名)、主機ディーゼル610馬力可変ピッチプロペラ1、補機ディーゼル100PS2基、リモコン(船橋、機関監視室各1)、電動油圧舵取装置1、ジャイロコンパス1、トロールウインチ(TSK)3000m用1、無線(250Wほか)、冷暖房

特色として(1)水中観測筒：船中で上下できる。水中に垂下、筒内で長時実験研究

(2)テレビカメラ(遠隔制御)

(3)高速機関、可変式プロペラ、バウスラスター(予定)

を具える。

IX 録 事

1 昭和41年度総会

日 時：昭和41年4月10日12.20～13.00

会 場：東海区水産研究所第一会議室

出席者：約120名

議 長：松平康男氏

議 事

1) 報 告 事 項

(1) 昭和40年度事業報告(平野幹事)

(2) 昭和40年度庶務会計報告(森田幹事)

2) 審 議 事 項

(1) 昭和41年度事業計画(平野幹事)

(2) 昭和41年度予算(森田幹事)……別記

(3) 会則変更について(齊藤幹事)

昭和41年度内に、役員選出(地区別会員による地区幹事の選出)を実施することになった。この会則変更による新会則は、本号別冊として会員に配布された。

記

昭和40年度決算および昭和41年度予算案

昭和40年度収支決算報告

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	133,539円	印刷費	369,650円
正会員会費	176,860	送料、通信費	32,162
賛助会員会費	350,000	編集費	10,000
会報売上金	44,750	シンポジウム座談会費	8,246
広告料	34,000	会合費	10,095
利子	7,648	交通費	19,080
計	746,797		